©2022 VIAL, YITP, Kyoto University
京都大学基礎物理学研究所　湯川記念館史料室

ケンブリッジ再見

湯川秀樹

ロンドンからケンブリッジへの自動車道路は坦々（たんたん）としていた。なだらかな丘陵の起伏の中に、牛の群れが静物のようにながめられた。はるか彼方に一群の白い建物が見えはじめた。キングス・カレッジのチャペルを中心とするいくつものカレッジの姿は何年か前に見たのと同じである。

苦になる国際会議

しかし会議出席者の宿舎として使われるキース・カレッジの新しい宿泊設備はあまりにもモダンで、その一室に案内された時、やや失望した。七百年の歴史を持つこの大学町も、やはり少しずつ変りつつあるらしい。この建物が会議場であるキース・カレッジまで歩いて十五分くらいかかるが、年古る巨木が陰（かげ）を落す老年の中の道は、私の家に近い糺（ただす）の森を連想させた。糺の森のつきあたりには白砂の中に朱塗りの鳥居が立っている。今、私の歩いている道の周辺には、いくつもの古城のような形の、あるいは中世の教会のような形の建物がある。それ等は古き古きアカデミズムの殿堂である。道の途中にはケム河にかかる橋がある。しだれ柳が河に影を落している。アヒルや白鳥が浮んでいる。以前に変らぬ静かな美しい景色である。しかし私の心は楽しくなかった。国際会議に出席することが、近年ますます苦になってきた。旧知、未知の数多くの学者の中にまじって、だれかと何かを話しつづけていなければならないのは、私にとっては苦業であり、刑罰を受けているようにさえ感じられる。孤独を求めて理論物理学者になったのに、どうしてこう度々国際会議に引っぱり出されねばならないのか。

湯川博士

物理学会議の錯覚

会議場について見ると、そこに予想外に多くの旧知の、そして非常に著名な物理学者を発見した。ロンドン大学のブラケットに会えたのは意外ではなかったが、コロンビア大学での同僚だったラビ、タウンズ、地元ケンブリッジのコッククロフト、モット、フランスのペラン、ソ連のタム、ボゴリューボフなどに、ここで会えるとは思っていなかった。まるで物理学の国際会議に出席したような錯覚を起こした。

しかし、この会議の主題は「軍縮と世界の安全保障」である。古いアカデミズムのワクから完全にはみだしてしまっている。十年前のラッセル・アインシュタイン声明がきっかけとなって、五年前の第一回のパグウォッシュ会議に招待された六十四人の中で、カナダの東海岸のさびしい漁村にやってきたのは私たち日本からの三人をふくめて二十二人の学者だけだった。学界の少数派であることを自認しながら、ひかえ目な声明を出した。ところが、わずか五年の間に形勢は一変してしまった。私の知っている外国の物理学者の大多数が、全面完全軍縮の達成に協力するのを当然のことと思うまでになっていることを、この第九回パグウォッシュ会議に出席して、はっきりと知ったのである。

今となっては積極的に協力しない学者の方が、かえって目立ってきた。ケンブリッジのセント・ジョンズ・カレッジにはディラックがいる。彼は人も知る天才的な理論物理学者である。この会議に彼の姿は見えなかった。夕方のパーティーにだけ出てきた。午前中だけしか会議のない日の午後、彼はタムと私を誘ってセント・ジョンズ・カレッジの塔の上まで一しょにあがろうと言い出した。ところどころ小さな窓から、うすい光がさすほかは、ほとんど真暗な中を、石の階段の一つ一つを足で確かめながら螺旋（らせん）状にゆっくりとあがっていった。塔の上からのながめは、すばらしかった。このあたりはイギリスの中でも特に平坦（へいたん）なので、遠くの古い寺院などまでが見通せた。タムは「おりる時の方があぶない」といいながら、先に立って階段の暗の中へ入っていった。彼は私より十歳以上も年上であるが、しっかりした足どりである。暗がりの中で数えて見たら階段の数は百九十であった。私たちの未来、人類の未来はこんなに真暗ではない。完全軍縮への光は少しずつ強くなってきている。一歩々々階段をあがってゆけば、やがて永続する平和の世界に到達する見込みはあるのである。

軍縮と日本の将来

ディラックは元来、平和主義な傾向の人である。彼がこの会議に出席しないのは、おかしいといえばおかしい。しかし氣も同じ理論物理学者の一人として、彼の気持はわかりすぎるほどよくわかる。ただ私の方は、科学者としての新しい責任をのがれることができないという気持ー一種の運命感に、より強く支配されている。そういう私の気持も、今日のように数多くの科学者が、パグウォッシュ運動に参加することになると、ずっと軽くなってくるはずであった。

ところが私の心の中では、別の心配が強くなってきた。日本は核兵器の禁止、核実験の停止を早くから世界に訴え、国際世論を平和の方向へ動かすのに、大きな貢献をしてきた。そして今や東西両陣営の政治家だけにはまかしておけないというわけで、数多くの科学者が全面完全軍縮実現のために努力するところまできたのである。

ところが今まで先頭に立っていた日本の方は、核兵器の禁止、核実験の停止というところから先を、あまり真剣に考えていないように見えるのはどうしたことか。平和憲法を保持する日本自身にとって、軍縮そのものは直接的には、大した影響がないように見える。しかし世界全体としての軍縮が進行してゆくにつれて、世界の様子はどう変ってゆくのか。それに伴って日本のあり方はどうあるべきか。特に軍縮後の世界の経済ーひいては日本の経済はどうなるのか。今から十分検討しておかねばならないことは、すでに五月の科学者京都会議の声明でも強調されている。

五グループで検討

今度のケンブリッジの会議では、約七十人の出席者が五つのグループに分かれて、軍縮に関係した色々な問題を検討した。その中で「軍縮の経済的側面」を取扱ったグループは、メンバーの数が一番少なかったが、結論は一番はっきりしていた。それは軍縮の経済的・社会的影響に関する国連の研究グループの報告の結論を全面的に支持するものであった。つまり「軍縮に伴うすべての困難は、適当な国内的・国際的方策によって克服できる。そうすれば全面完全軍縮は全人類に対する申分のない福祉となるであろう」という楽観論を再確認するものである。しかも軍縮はこの側面から見れば、二年から四年という短期間に行なっても、さしつかえないというのである。

こういう結論がふたたび得られたということは、平和の愛好者にとって、何とも心強いことである。しかし一口に適当な国内的・国際的方策といっても、それを詳しく見れば、国によって色々とやるべきことが違うであろう。日本としてはどうすればよいのか。日本へ帰ったら、各方面の人たちの教示を受けたいという気持を強く感じた。

それと同時に、こういう会議は、私のような傾向の人間には、やはり場違いだという感じもだんだん深くなっていった。ディラックがうらやましくなってきた。そのせいか、心身ともに疲労した。そしてロンドンへ戻ったら風邪を引きこんでしまった。

（京大基礎物理学研究所長、ケンブリッジとロンドンで開かれた第九回及び第十回のパグウォッシュ会議に出席して、このほど帰国した）

朝日新聞　昭和三十五年九月二十日　木曜日

軍縮の側面検討

科学者の新しい責任

（京大基礎物理学研究所長）湯川博士

37.9.20 朝日新聞

毎日新聞　昭和三十五年九月十九日

37.9.19 毎日新聞

c081-013-015